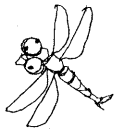
教師を束縛するもの

米国の幼児教育誌
—Childhood Education—



4月号は、「教師を束縛するもの」という特集のもとに、いくつかの論文が載せてある。その中の一つの、教師を縛っているものは何かという表題の論説を中心にして、現代の幼児教育にたずさわる保育者の当面している問題にふれてみよう。

現代は他のいかなる時代よりも複雑であり、混乱した時代である。いろいろの違った種類の人々が、互いに対等の立場で接触し、その間には利害が相反し、その生活の信条を異にし、感情を異にしている。人種の問題、職場の人間関係、労使の関係、学生運動、家庭における人間関係など、単純に解決しきれない多くの課題をふくんでいる。このような時代に、教育の果たさねばならぬつとめは実に大きいのである。どのようにしたら平和のうちに問題解決をすることができるか、個性を発揮しながらしかも集団生活の要求に従うことができるか、異なった考え方や思想を理解しながら共通の理解を求めていくことができるかなど、いずれも教育の負っている課題なのである。教師がこのような大きな課題ととり組むためには、全人格、全能力を傾けて、日々の問題に当たることができるようになっていなければならない。

しかるに、この十数年来、教師に対して絶えざる批判の眼のみが向けられてきた。教師を励まし力づけるようなことばはほとんどきかれなかった。教育の指導層の人々はこの傾向を助長した。ある評論家がいっているが、最近の教育批評は、計画的に混乱を作り出しているようなものである。火のないところには煙は立たぬという諺があるが、むしろ、煙の立つところでは、だれかが火消しつぼをひっくりかえしているのだ。いまや建設的な批判の精神は失われ、教師は教育指導者の批判によって恐怖にかりたてられ、防衛的になっている。彼らは安全な領域に逃げこみ、子どもの教育は消極的になっている。

よみかき、算え方がこのごろの幼稚園では無視されている。音楽や造形などむしろなくてもよいのだが。

このごろの子どもの学力は低下している。もっと小さいときから知的訓練のドリルをする必要があるのだ。

赤ん坊のときから、字をよむ訓練をはじめることができる。それなのに、どうして幼稚園でもっと字を教えないのか、このような批判の声が次々に教師の耳に入ってくる。

こういう声に対して、教師ははっきりと答えるだけの確信を持っていない。その確信のなさが、教師を縛っているのだ。教師だけではない。全教育界が、こういう声におびやかされているのだ。そして、一世紀前に通りすぎたはずの教育思想に再びもどろうとしている。

ある教育評論家は次のようなことをいっている。校長や園長や管理者は、自分の園で本当の教育が行なわれているかどうかということよりも、世間の批判に対してより敏感になっている。世間の支持のない本当の批判は、管理者にとってはほとんど問題にならない。世間の支持のある批判は、小さなことでも管理者にとっては大問題になる。

しかし、教育者は、本当の問題をとり違えてはならないのである。

われわれは、重要な問題を回避しないで、はっきりと見なければならない。

教育がその要求にこたえる必要のあるのは、まず第一に、成長しつつある子どもの要求にこたえることである。それは、からだと心と魂を養うのに必要なものは何であるかを考えていく努力である。世界中に空腹のものがなくなるような世界を作るために、他人とともに仕事をすることができるような人間、国際的な問題を平和的に解決する道を見出すことができるような人間、職場や身近な生活の中で、異なった考えを持つ人々と共に生活して共通の理解を求めていくことのできるような人間、このような人間を作るのに必要な教育を考えていくことこそ、現代の教育の負っている課題なのである。

そして、幼児期は、このような課題にこたえることのできる時期である。幼稚園やナースリースクール、保育所の教育の内容を改善する必要が迫っている。このような教育の目標に向かって、教師と親は力を合わせていかねばならない。人間が自分自身の中に平和を保ち、お互いに平和を作り出していくためには、健康と、社会と、芸術にもっともっとカリキュラムの強調点がおかれなければならない。

教師は、現代の教育批判にとりこになってはならない。子どもたちとともに、子どもたちの中ではたらきながら、そこで成長し発達していく子どもたちの姿をみて、そこで養われる満足と確信によって教育していかなければならないのである。（T）